

Faulkner 文学における〈父殺し〉 ——伝記とテキストからの分析——

田 中 久 男

伝記的には、ウィリアム・フォークナーと父マリーとは緊張関係にあった。作者フォークナーは、そこから生ずる屈折した感情を、まず否定的な父親像、不在の父親像を造形することによって、文学的に父を懲罰し抹殺しようとした。しかし、父子関係は家族関係の一部であるが故に、その父への懲罰は自己懲罰として跳ね返ってくるという逆説、すなわち、被害と加害はつねに逆転するという問題を、彼は初期傑作群を創造していく中で深く認識したようである。自己懲罰は、自滅型の息子像として表れている。そうした様相を、伝記的にまず確認し、それをテキストにおいて究明するのが、本論の目的である。

[キーワード：父殺し、父子関係、ドストエフスキー、漱石、アンダソン]

1. はじめに

ウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897–1962) が父親マリー・カスバート・フォークナー (Murry Cuthbert Falkner, 1870–1932) とそりが合わなかったというのは、伝記的にはよく知られた事実だが、それがフォークナー文学において、ドストエフスキー (Fyodor Mikhailovich Dostoyevsky, 1821–81) の場合のように、父殺しのテーマと結び付けられて論じられることはなかった。フォークナーは象徴的には、彼の文学的父とも言えるシャーウッド・アンダスン (Sherwood Anderson, 1876–1941) を、アーネスト・ヘミングウェイ (Ernest Hemingway, 1899–1961) が行ったほどのあくどさや辛辣さはないにしても、言葉によって殺すようなことを実行した。すなわち、ヘミングウェイが恩人でもある先輩作家の『暗い笑い』 (*Dark Laughter*, 1925) のパロディ小説『春の奔流』 (*The Torrents of Spring*, 1926) を発表して、彼の単純素朴を信奉する文体や感傷性を風刺したのとまさに同じ年の7か月遅れの12月に、フォークナーも『シャーウッド・アンダスンと他の有名なクレオールたち』 (*Sherwood Anderson and Other Famous Creoles*, 1926) という、ニューオーリンズ時代の友人ウィリアム・スプラトリング (William Spratling) と共同で出版した戯画的な画集の「序文」で、アンダソンの文体をやんわり風刺して虚仮にし、言わば文学的な父殺しを行ったのである。この〈父殺し〉という重い魅力的なテーマを、フォークナーは創作においても追求してもよかったはずなのに、なぜか回避、あるいは抑圧した。少

なくともそのように見える。いや、もしかしたら回避、あるいは抑圧したように見えながら、実は父と子の関係、さらには家族関係というフォークナー文学に顕著なパターンに変奏されて、隠されたのだろうか。

このような問題意識を基に、フォークナーの複数の伝記作家が捉えた彼の内面のドラマやその表象としてのテキストを検証しながら、作家の想像力のかたちとでも呼べるような構造的な織物の中に、〈父殺し〉という模様が見い出せるのかどうかを追究するのが、本稿の目的である。

2. 伝記的な父子関係

ジョゼフ・フロットナー (Joseph Blotner) の伝記によると、作家フォークナーは大柄のマッチョ・タイプの父親に、母親モード (Maud Butler Falkner, 1871–1960) から受け継いだ引き締まった唇の薄さを”Snake-Lips” (Blotner, 187; Wittenberg, 23; Fowler, 24; Gray, 80)と、揶揄と侮蔑を込めて呼ばれ、定職にもつかず、アルバイト仕事をしながら作家修業する姿を、冷たい目で見られていたようである (Wittenberg, 26; Gray, 65, 84)。その父はウェスタンものを愛し、息子の小説を一冊も読んだことがないと公言していたが (Wittenberg, 19; Fowler, 24)、母の方は、自らの母リーリア・バトラー (Lelia Dean Swift Butler, 1849–1907) の絵画の才能を受け継いで芸術的感性を持っていたので、息子の芸術的な情熱には深い愛と理解を示していた。

一方、息子から見た父親は自分が熱情を持って身を入れていた鉄道の仕事を、”Young Colonel”と呼ばれた父ジョン・ウェズリー・トンプソン・フォークナー (John Wesley Thompson Falkner, 1848–1922) が鉄道会社ガルフ・アンド・シカゴ鉄道 (Gulf & Chicago Railroad) を 1902 年に売り払ったために失い、それ以後、精神的に根なし草のような状態になり、貸し馬車屋、石油会社の代理店、金物店等と多くの職種に手を出したものの、いずれの仕事もうまくいかず、失地挽回のために西部でカーボーイになることを夢見たが、そうした逃避的なロマンティックな夢に対しては、厳格な性格の妻から強く反対された。それで彼は酒でうっぷんを晴らし、いっそう酒におぼれるという自滅的な生活に落ち込むことになった。

このような父親の姿は、家父長制度が支配的な 20 世紀初頭の南部ミシシッピ州オックスフォードという片田舎では、妻の支配に屈している実に不甲斐ない夫、つまり、息子のフォークナーから見れば、世の中の営みの現実原則によって去勢された父親というふうに見えただろうことは、想像に難くない (Blotner 1984, 307–308)。父マリーが 1932 年 8 月 7 日に 62 歳になる直前に心臓発作で亡くなったとき、作家の友人で文学代理人でもあったベン・ワッソン (Ben Wasson, 1899–1982) 宛ての手紙で、「おやじはおふくろにたった 1 年分ほどの経済的保証しか残してやらなかった。それで今度はおれの番ってわけだ」 (*Selected*

Letters, 65) と、父の早すぎる死によって、フォークナー家の長としての経済的負担が自分に降りかかってきたことに対し、恨みと嘆きをこぼしているし、約 10 年後の 1940 年 5 月にランダム・ハウス社のロバート・K・ハース (Robert K. Haas) に宛てた書簡では、さらに父親の負債と扶養すべき親族と同居人を受け継いだ境遇を異様な激しきで呪っている (*Selected Letters*, 122)。死の直前の父マリーの姿は、家族には「ほとんど気のふれた人間 (a demented person) のように」見えていたようで、フォークナーはそうした父を、「ただ諦めたんだよ」、「生きるのに飽きたんだ」(Blotner 1984, 108) と、同情と軽蔑の混ざった眼差しで、突き放して見ていたようである。

3. フォークナーの彷徨と孤独

このような家庭状況において、大柄でマッコタイプの子の二歳違いの弟ジャック (Murry Charles Falkner, Jr., 1899-1975) は、父親っ子、作家となった長男のビルは、小柄で顔も母に似ているということで、世間的には母親っ子と見られていたようだが、逆に言えば、作家フォークナーは父親からうとまれていると感じた分、母親との強い絆、いわゆる精神的な固着 (fixation) を引き起こしていたと思われる。この構図は、まさに「エディプス・コンプレックス」と呼ばれるもので、先ほど触れた父に対するフォークナーの言葉から推察できるように、この古典的な心理劇の葛藤はかなり濃い澱のようなものとして、フォークナーの中で内面化されていたはずである (Fowler, 24-26)。とすれば、当然ながらこのことが、シグムント・フロイト (Sigmund Freud) がギリシャ悲劇のソフォクレス (Sophocles) の『オイディプス王』 (*Oedipus Tyrannus*; 小此木, 63) から抽出した父殺しというおぞましい罪と、呪われた運命という人類普遍の問題に結びつく可能性があるだろうことは、容易に想像できる。

フロイトはまた「ドストエフスキーと父殺し」の問題にも深い関心を寄せて、そうしたタイトルの論文を著わしてもいるという事実が誘発されて、筆者はこの父殺しの衝動がもしかしたら、フォークナー文学にも表れている、あるいは抑圧されて隠されているのではないかと仮定したのが、本稿を起こしたそもそもの出発点である。その際、新訳を試みて評判となったドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』(光文社文庫)の訳者・亀山郁夫氏が巻末に付した長大な解説のことが想起された。特に同氏の次の文章は、本稿の主題に重なってくるものであった。

兄弟[イワンとアリョーシャ]のやりとりに、カインとアベルの神話が入り込んでくるのは、かなり物騒な印象を与えるが、これは文字通り、作者による「象徴層」への誘導にほかならない。つまり、「父殺し」のテーマにからめて「兄弟殺し」のテーマを入りこませ、ミーチャとイワンの心理的対立を、神話的レヴェルで暗示する仕組みである。こ

れがさらに、作者自身の「父殺し」の経験へと結びついていくときに、こんどは「自伝層」のかくされたドラマをも照射することになる。(亀山、279)

亀山氏は訳書の方では、「物語層」、「自伝層」、「象徴層」と区分していた『カラマーズフの兄弟』の3層構造を、2009年出版の『ドストエフスキー 共苦する力』(東京外大出版会)では、「自伝層」と「象徴層」の間に「歴史層」を入れて4層構造のプリズムから再度分析している。本論ではこれらの概念を、『カラマーズフの兄弟』のような単一のテキストではなく、『響きと怒り』(*The Sound and the Fury*, 1929)や『八月の光』(*Light in August*, 1932)等、初期の傑作群に適用することで、「父殺し」というフォークナー文学においては見えにくいテーマについて考察してみたい。

もうひとつ、本稿の主題に関連して言及しておかなくてはならない、外形は簡便に見えるが中身はずしりと重い充実した本がある。それは『漱石 母に愛されなかった子』(岩波新書)と題された三浦雅士の啓発的な本である。「幼い漱石はやがて[里子に出されていた]その古道具屋から取り戻される。が、ほとんどすぐに新たな家に養子に出される。ところがその養家のごたごたで実家に戻るといようなことになった。実家では、最初の頃、実の両親をお祖父さんお祖母さんと呼んで少しも怪しまなかった」(三浦、20)というような、例の有名な漱石幼少時の過酷な体験に似た記憶は、もちろんフォークナーにはなかった。しかし、何が過酷な思い出となり心の傷となるかは、個人の心構えによってかなり違ってくるし、三浦が鮮やかに分析する漱石の魂の葛藤は、フォークナーの抱えた苦悩に十分通じるものがある。「捨てられるくらいなら、こっちから捨ててやるという論理にしがみつき、そういう煩悶から超然とすべく漢籍に走り、表現者への道を選んだ」(三浦、122)と解き明かされる漱石の心性は、文学の道に進んでいくフォークナーの姿を思い起こさせる。すなわち、両親の絶え間のない争いやごたごたした関係にさらされて、徐々に学業が怠慢になって高校を中退し、家族や周囲の世界と距離をとって超然とした独自の世界を堅持するために、イギリス・ロマン派の詩人ジョン・キーツ(John Keats, 1795-1821)や、世紀末耽美派のアルジャーノン・チャールズ・スウィンバーン(Algernon Charles Swinburne, 1837-1909)などの影響を受けて詩作に走り、詩人として、それから小説家として、表現者への道に深く傾斜していくフォークナーの軌跡に重なるものである。

彼はまた、フランス象徴派の詩人ポール＝マリー・ヴェルレーヌ(Paul-Marie Verlaine, 1844-96)や道化の詩風で知られるジュール・ラフォルグ(Jules Laforgue, 1860-87)たち、あるいはイギリス世紀末の特異な挿絵画家オーブリー・ビアズリー(Aubrey Beardsley, 1872-98)の芸術にも影響を受けた。社会の異端児として挑戦的に生きたビアズリーの画風の影響が、フォークナーの一幕ものの夢想劇『操り人形』(*The Marionettes*, 1975; 1920年創作)等のペン画に濃厚に反映しているという事実は、彼自身が社会の異端児となること

に躊躇しなかったことの証しであり、自分の性癖に忠実に生きる表現者になろうとする彼の決意の強さを示唆している。その表現者への道を選択するに当たって、漱石もフォークナーも、自己の世界を守るために必然的に落ち込まざるを得なかった孤独を恐れなかったし、ある意味でその孤独が、作家としての成長には必要であった。そのことを、三浦は深い独特の視点から次のように考察している。

その孤独のなかで漱石は、生きていくうちに何かしとおおせねばならぬ、と考える男へと成長してゆく。なぜか。認められたかった、認めさせたかったからです。有無を言わず認めさせることによって家族を罰したかったからだ」(三浦、210)

三浦はさらに踏み込んで、漱石にとって孤独は、「慰撫以上のもの、すなわち快楽を意味した」(三浦、203)とまで言い切っているのだが、この孤独の肯定的な意味の解釈は、もしかしたらフォークナーの大理石の牧神像や、ピエロ像にも当てはまるのではないか。というのは、「ピエロはフォークナーにとって、特に彼が酔ったときには、恐怖と懸念の人物、すなわち芸術と実人生における敗残者の化身、彼の一方の自我である暗い分身となっていた」(Sensibar, 151)というジュディス・センシバー (Judith Sensibar) の解釈が典型的に示すように、従来のフォークナー批評では、ピエロ像は鬱屈やうらぶれという作者の内面風景の化身として、消極的なイメージで捉える方向が有力であった。

事実、筆者自身も『ウィリアム・フォークナーの世界——自己増殖のタペストリー』(南雲堂)を著わしたときには、その趨勢に従っていたのだが、しかし、ピエロ像やさらにフォークナー詩の代表的な大理石の牧神像を、逆境に追い込まれた故に退行し沈黙している姿としてではなく、自ら選びとった生き方としての克己と孤独の化身というふうに見てみると、彼の若い時の彷徨も違った様相を帯びてくる。フォークナーの内的、外的な彷徨状態は、カナダのイギリス空軍 (RAF) を除隊になって帰郷した年の翌 1919 年、彼が 22 歳の頃に、故郷ミシシッピ州オックスフォードを南北に挟むメンフィスとニューオーリンズの両都市を含めて、州内をうろつき回るという空間的な移動としてまず顕著に表れた。「生まれつき私は、放浪者であり浮浪者でした」(*Lion in the Garden*, 249)という自嘲気味の自己判定が示唆するように、彼のいわゆる文学就業時代には、外見を無視することで、自分は違うという身振りを誇示し、またそこにアイデンティティを見い出して居直ろうとする歪んだダンディズムがあった。実際、1925 年 7 月に渡欧しフランスで数カ月生活をしていたときにも、6 回も警官に逮捕されるという苦い体験をしているが (Watson, 219)、それは彼が身体的にも警官に疑われるような放浪者の風体をしていたことを暗示している。

このニューオーリンズやパリにおけるフォークナーの文学就業時代は、故郷ミシシッピという home がありながら、いわば homeless になっていたという意味で、彼が家庭の両親の

不和で経験した精神的「家庭喪失」(homelessness)を、もっと空間的、形而上的に押し広げた形での反復だと言える。しかし、この「家庭喪失」を逃避と捉えるのではなく、『ディアスポラの思考』の著者・上野俊哉氏の表現を借りれば、「ホームレス性(家のないこと)そのものをホーム(家=精神の故郷)として生きる」(上野、32)ことを、むしろ進んで選択したと解釈すれば、先述の漱石にとっての孤独という三浦の洞察に連結できるはずである。このhomeとhomelessnessとの緊張関係を、創造的な価値に変えていくことをフォークナーは積極的に考えたと捉えれば、作家フォークナーが誕生したエネルギーの源泉がずっと分かりやすくなる。

以上の若干の伝記的情報を踏まえて本論の「父殺し」の主題に立ち戻ると、比喩的に言えば、また象徴的なレヴェルで言えば、フォークナーは父殺しを経験している。宗教学者の島田裕巳氏が『父殺しの精神史』(法蔵館)という本の中で、「私の柳川論は、結局のところ、“師殺し”の企てだったのではないだろうか」(島田、15)と自問しているように、自分の師である柳川啓一の業績を歴史的なパースペクティブの中で丹念に価値づけ、意味付けを行う作業は、比喩的には師の喪に服す儀式であると同時に、また師を殺す、つまり、父殺しの儀式でもあると捉えている。同じように、例えば、四方田犬彦氏が故人となって久しい恩師の由良君美についての長大な追想文を著したが、その行為も、四方田氏が感じていたように、師に対する深い敬愛の表明であると同時に、また師の生涯の歩みを公正に位置づけ評価のまな板に乗せようとする、親殺しの象徴とも言えるものである。

このような行為をフォークナーは誰に対して敢行したかと言えば、それは本論の冒頭で言及したように、「自分たちアメリカ作家の世代の父に当たる」(*Lion in the Garden*, 249)と明言していたアンダソンに対してである。フォークナーは自分が作家になるきっかけを作ってくれた恩人でもあるアンダソンに関するエッセイ(“Sherwood Anderson: An Appreciation,” 1953; 後に、“A Note on Sherwood Anderson”と改題して、*Essays, Speeches & Public Letters by William Faulkner*に収録)の中で、彼のアメリカ文学における不当な評価の低さを嘆きはするものの、単純素朴な文体を信奉するあまり、それに呪縛されて、本来は手段であるはずの文体が目的と化してしまった先輩作家の文学的営みの弱点を鋭く見抜いていたことを明かしている。文学の師とも言うべきアンダソンに対し、当時ニューオーリンズのチュレーン大学の講師で、画家と建築家でもあったスプラトリングの風刺画に、アンダソンの文体を揶揄する序文を付けるという恩をあだで返す裏切り行為によって、半ば師を文学的に殺すという血なまぐさい罪を犯してしまったのである。

さらにこの象徴的レヴェルで言えば、フォークナーは、彼の若い修業時代の導師役を務めた同郷の4歳年上のフィル・ストーン(Phil Stone, 1893-1967)に対しても、作家として彼の影響下から脱して精神的独立を図ろうとしたときに、アンダソンの場合と同類の父殺しを犯しているのである(Hamblin, xi-xxviii)。

4. Faulkner 文学の父殺し

このような象徴的なレベルでの父殺しとは別に、フォークナーはテキストの中でも例えば、「納屋は燃える」(“Barn Burning,” 1931) という短編の中で、父親の放火癖を許せない気持ちと、父親が説く一族の血に対する忠誠心との間で揺れ動くコーネル・サートリス・スノープス (Colonel Sartoris Snopes) 少年が、結局は倫理的な正義感からド・スペイン少佐 (Major de Spain) の館に告げ口に行く行為は、少年による父殺しと解釈できる。つまり、たとえ直接には手を下さなくても、スノープス一族の血に対する裏切りが、物語の結末で示唆されている父の死につながったという意味で、父殺しに加担したと言えるし、少年は心の底ではおそらく、反社会的な行為を繰り返す父の死を願っていたのではない。

『八月の光』(*Light in August*, 1932) の中で、ゲイル・ハイタワー (Gail Hightower) 牧師が回想する彼と父との関係は、殺意を匂わすほどのものである。病弱の母と彼が「二匹の小さな動物のように住んでいる」世界に侵入してくる、まさに「異邦人などというより、敵であった。二人とは違った匂いがした」(475) というハイタワーの回想や、「清教徒と騎馬兵の間」(474) の世界に立って自己の信念を守り、「自分が二つの完全な別個の人間である」(474) ことに、いささかのやましさを覚えることもなく、「自分の国土を侵略し荒廃させた連中を使って、[医者という] 職業を身につけた」(474) という批判的なコメントから推察できるように、敵である父を殺して、母との一体感を希求するエディプス・コンプレックス的な感情が、少なくとも彼の潜在意識として示唆されている。このような象徴的なレベルから物語のレベルに降りてみると、父殺しのテーマはテキストではほとんど具体化されていない。唯一取り上げることができるのであれば、同じ『八月の光』の中で、ジョー・クリスマス (Joe Christmas) が自分とボビー・アレン (Bobbie Allen) との関係を探りにダンス・パーティに乗り込んできた養父のサイモン・マッケカーン (Simon McEachern) をイスで殴り倒し、養父の死が暗示されている場面であろう。

それではフォークナーがこの父殺しという文学的には魅力的なテーマに無関心であったかと言うと、決してそうではない。いや、むしろかなり深い関心を持っていた。彼は父親に対するネガティブな感情を、単なる毒として内にため込むのではなく、作家としてしたたかに有効利用したのである。つまり、芸術的に作品に昇華することによって、その解毒、緩和を考えたのだ。内に淀むその屈折した感情を、彼はまず否定的な父親像、あるいは不在の父親像を造形することによって、文学的に父を抹殺しようとしたと筆者は推察している。そうした彼の心理的姿勢は、第一作の『兵士の報酬』(*Soldiers' Pay*, 1926) の帰還兵ドナルド・マーン (Donald Mahon) の監督教会派の牧師である父のふがいなさに見て取れる。しかし、その牧師は、第一次世界大戦という時代の荒地的な毒に当てられたために、精神がどこかで麻痺しているように描かれているので、必ずしも牧師の内在の弱さ故に、ふがない父親に

なり下がっているとは言えないかもしれない。その意味で、フォークナー文学における父親の造形とその変容は、やはりヨクナパトーフア・サーガの出発作となった『土にまみれた旗』(*Flags in the Dust*; 『サートリス』 [*Sartoris*, 1929] のオリジナル版) から検討していく方がいいだろう。と言うのは、父親の存在は、南部社会の家父長制の仕組みと深く関わっているからである。

5. 不在の父と自滅型の息子

本来なら、大家族的な家族制度の中で重要な位置を占めるはずの父親が、この『土にまみれた旗』では不在として扱われている。その理由を問われて、フォークナーは「双子の兄弟の父には物語がなかったのです。(中略) 1870年から1912-14年の間では、アメリカ人には語るべきものは何も起こりませんでした。父であるこのジョン・サートリスは、勇敢で剛健であるとか、劇的であるとかいう場面に遭遇することが何もない時代に生まれ合わせたのです」(*Faulkner in the University*, 251; Gray, 67) と、時代の巡り合わせの悪さのせいにしてしている。もちろん、この『土にまみれた旗』という作品が、南北戦争と第一次大戦との戦争形態や、戦争の大義に関するイデオロギーの違いを、それぞれの世代に属する人間の行動様式や価値観の相違を通して浮き彫りにするというモチーフの基に構成されているので、どちらの世代にも属さない父の出番はなかったというフォークナーの説明は、不自然ではなく納得できるものだし、取り立てて疑義を差しはさむ余地はなりだろう。

しかし、この『土にまみれた旗』の後に続く作品において、不甲斐ない父親や不在の父親が続いてくると、読者はフォークナーの偏執狂的な想像力(創造力)の傾向に注目せざるをえなくなる。『響きと怒り』のジェイソン・リッチモンド・コンプソン III (Jason Richmond Compson III) 氏や、『死の床に横たわりて』のアンス・バンドレン (Anse Bundren) という、子供にとっては不甲斐なく頼りにならない父親、あるいは『サンクチュアリ』のホレス・ベンボウ (Horace Benbow) の父で、彼が第一次世界大戦から帰還するときに、「監督派教会の牧師になることを父に告げるはずだった」(*Flags*, 165) のに、父の死と共に彼の弁護士事務所を継承したということになっている(このような事情は『サンクチュアリ』ではなく、『土にまみれた旗』で説明されている)、物語では不在の父ウィル・ベンボウ (Will Benbow) というふうに、子供たちの悩みに向き合うことのない父親像が続く。このような父親像は、氏族 (clan) という縦の関係、いわゆる血の継承を重んじる南部の大家族的な制度においては、物語の劇的な推進力を生み出すという審美的な創作上の戦略から作り出されたという面は確かになくはないが、こうしたネガティブな父親像の背後に、伝記的に確認できる作者自身のわだかまりの感情、言わば象徴的な父殺しの衝動が秘められていると推測することは、あながち読み込みすぎにはならないだろう。

しかし、もちろん作家フォークナーは、父に対する淀んだ屈折した感情を、そのように否

定的な父親像を創造することで仕返しをし発散しようとしたと解釈するだけでは、やはり単純すぎるのである。というのは、それを相殺するかのように、彼はやはり不甲斐ない息子、現実の困難に立ち向かえない内向的な息子を描いているからである。芸術的創造力という、父にはなく彼には恵まれている才能が人を殺せる武器になることをおそらく深く認識していた彼は、そのような息子像の創出によって、自己懲罰を行い、否定的な父親像の創造に絡まる罪悪感を解消しようとしたのではないか。さらに深い潜在意識のところでは、その自己懲罰に見える自滅的な息子像は、フォークナーの祖父の目に見えていたはずの父の自滅的な姿を見せつけようとする実に悪意に満ちた高度な当てこすりの可能性もなくはないだろう。だが何よりもフォークナーは、父を描くことはとりもなおさず、断ち切ることのできない父子関係の中で自己を描くことであるという逆説を、故郷や親族をモデルにした小説群を創造し始めた『土にまみれた旗』執筆の時点で、気づかざるを得なかったに違いない。すなわち、否定的な父親像を描けば、返り血を浴びて、息子像にはねかってくるという必然を覚悟するように迫られたし、父子関係はまた家族関係の一部であり、父を描けば結局、家族全体を描くことになるという認識を余儀なくされたのだ。つまり、陰に陽に自分の家族や一族がモデルとなりかねない小説では、それをもひるむことなく直視して生き抜く覚悟を決めることが、作家としての誠実さであることを自覚したと思われるのである。

『響きと怒り』におけるクエンティン・コンプソンの自殺は、両親の不和という複雑な家庭環境や南部社会の伝統の重みの犠牲者という印象を読者に与えるが、同時に、その自殺は父の飲酒癖を募らせ、死を早めたという意味で、加害者にもなっているのである。ソール・ベロー (Saul Bellow, 1915-2005) が『犠牲者』(*The Victim*, 1947) で描いたように、また三浦雅士が「漱石の『心』のもっとも大きな問題」だと捉えたように、「被害と加害はつねに逆転しうる」(三浦、180) という命題にフォークナーは意識的であった。とすれば、クエンティンの自己懲罰のように見える自殺は、実は不甲斐ない父、息子の苦悩に有効な救いの手を差し伸べることができない父への懲罰を込めた息子の抗議という面をも強く持っていることを、読者は認識しなくてはならない。それと同じように、クエンティンの自殺は、精神的に子供たちの愛の欲求を受け止める姿勢も意欲もない母親への懲罰でもあるのだ。というのは、「ぼくにお母さんお母さんと言えるようにお母さんがいてくれたら」(*The Sound and the Fury*, 172; 原文はイタリックス) という彼の恨みのこもった嘆きが示唆するように、彼の母であるコンプソン夫人 (Mrs. Compson) は、彼女の弟モーリー (Maury L. Bascomb) との近親相姦的な密着した関係の中で、妻と母の役割を拒否しているからである (Weinstein, 4)。「ほかの子供たちはわたしを愛してくれませんがあの子たちはコンプソン家のあの利己主義と虚栄心の血を引いているからなんにも愛したことはないのです[二男の]ジェイソンだけはわたしが恐れずに胸を開ける子供なんです」(*The Sound and the Fury*, 102; 原文にも句読点なし) と夫に向かって言う彼女の言葉は、どうやら夫婦間の日常的な不和の光景の一部

として、クエンティンの記憶には澱のようにこびりついていることが彼の内的独白から読める。このコンプソン夫人や、『死の床に横たわりて』のアディ・バンドレン (Addie Bundren) の人物造形を念頭においてみると、どうやらフォークナーは、母モードに対しても、必ずしも肯定的な面だけを見てはいなかったのではないかという疑念が生じてくる。

この問題は、本論の主題から逸脱してしまうし、紙幅の関係からも別稿にゆずらなくてはならない。が、ここで指摘しておかなくてはならないのは、フォークナーは父の生前には彼と和解することはなかったが、『ポータブル・フォークナー』(*The Portable Faulkner*, 1946) 編纂の準備に入っていたマルカム・カウリー (Malcolm Cowley) 宛ての書簡で、「私は多かれ少なかれ、父の貸し馬車屋で成長しました。四人兄弟の長だったので、母の影響下から容易に逃れることができたのです。というのは、その仕事の見習いをするのはいいことだと父が考えていたからです」(*Selected Letters*, 212) と、貸し馬車屋で過ごした経験の意義を強調して、父との精神的なつながり、父への恩義を暗に認めている (Gray 68)。フォークナー文学にとってホモソーシャルな集いの象徴である狩り (hunting) の行事や、馬の役割の重要性、あるいは彼の馬への愛着や、ヴァージニア大学との関係ができてからの乗馬へののめり込みを考えると、少年期を貸し馬車屋で過ごした体験は、彼に貴重な社会観察の機会と文学的リアリズムを保証する素材を提供したことは間違いないのである。「母の影響下」という彼の言葉が示唆するように、母の存在が必ずしもフォークナーには肯定的な影響のみではなかったと同様に、父の存在が必ずしも否定的な側面のみではなかったということは、公平のためにも言うておかなくてはならない。もちろん文学修業時代に故郷を離れた場所から両親に宛てた作者の書簡を整理したワトソンが、「明らかに彼は父のことを、知的というよりはむしろ物理的な面から考えていた」(Watson, 15) と分析しているように、また創作の進行状況を母に報告している書簡 (Watson, 222-25) からも推察できるように、父を自分の芸術的なよき理解者とは見なしていなかったことだけは確かである。

ここで先ほど紹介した『カラマーゾフの兄弟』についての亀山氏の解説、つまり、父殺しのテーマと兄弟殺しのテーマとの絡まりによって生み出される物語世界の複層性のことを想起したい。もちろん、フォークナー文学の物語レベルでは兄弟殺しは起こらないが、心理劇としては、父殺しの衝動と同じように、秘めた葛藤劇としては描き出されている。その際、彼は自滅型の息子像にこだわったが、さらに、それに兄弟間の心理的葛藤のドラマを絡ませるという戦略を取った。第一次世界大戦の帰還兵として自虐的な生活を求めるベイヤード・サートリス III (Bayard Sartoris III)、コンプソン家の期待を担ってハーヴァードに入学しながら、自殺してしまうクエンティン、家族の中での自分の居場所が見つからず狂気に追いやられるダール・バンドレン (Darl Bundren) たちは、家族という社会の縮図の中で、兄弟との精神的な葛藤に苦しめられる。なるほど彼らは直接には兄弟殺しの罪を犯すことはないが、内面ではそのような殺意の影を十分認めることができる。

例えば、自伝的要素が最も濃く織り込まれている『土にまみれた旗』のベイヤードは、第一次世界大戦で戦死した双子の弟ジョン(John Sartoris)の死に罪意識を感じているが、同時にまた、弟のように名誉と蛮勇を尊ぶサートリス家の血に殉ずることもなく、無傷で生きて帰還したことから生ずる負い目、後ろめたさ、家の名折れとなったことへの口惜しさや劣等感も、彼の中では激しく渦巻いていた。帰還したベイヤードが、無謀運転による自動車事故で、同乗者の祖父の老ベイヤード(Old Bayard Sartoris)のショック死を引き起こし、結婚したナーシッサ・ベンボウ(Narcissa Benbow)との間の息子が生まれる日に、異郷の地で安全の疑わしいテスト飛行機で命を断ってしまうという周囲には不可解に見える行為は、罪悪感故の自己懲罰的な死の願望に突き動かされた結果なのであるが、彼が自分よりは「温かみがあり、気さくで陽気で野性的な」(“a warmer thing, spontaneous and merry and wild”; *Flags in the Dust*, 64) タイプの若者として人々に記憶されている弟への羨望やねたみは当然あり、ベイヤードが弟の遺品を燃やす場面(Flags, 204-205)は、弟を記憶から抹殺しようとする別れの儀式の様相を帯びている。おそらくこの双子の関係には、第一次世界大戦のヨーロッパの激戦地で負傷しながら戦功をあげ、消息が分からなくなって両親の心配と愛を独占し、名誉の帰還兵として英雄的な歓迎を受けた2歳下の弟ジャックに対するフォークナーの屈折した内面が投影されていることは間違いない。ジャックは幼少の頃、母方の祖母リーリア・バトラーに特別食を用意してもらうほどに溺愛されたが、ジュディス・ウィッテンバーグ(Judith Bryant Wittenberg)は、「そのジャックへの偏愛と抱き合わせになっているリーリアの信仰の篤さは、深い信仰心の持ち主でさえも道徳的な不正を犯すことがありうるという認識をウィリアムに植え付けたかも知れない」(21)と、フォークナーの内面にあつたはずの感情の陰影を洞察している。

これまで見てきた否定的な父親像、息子像に変化が生ずるのは、どうやら父マリーが死亡した1932年、つまり、『八月の光』出版後に、南部社会を歴史的に相対化する視線を導入する『アブサロム、アブサロム!』(*Absalom, Absalom!*, 1936)においてである。そのきっかけになったのは、『響きと怒り』の新版をランダム・ハウス社が1933年に予定した折にフォークナーが用意した「序文」で、「シカゴが中西部、ニュー・ヨークが東部という意味での南部は、南北戦争によって殺され死んでいます。気まぐれに新南部として知られているものは確かにありますが、それは南部ではありません」(Introduction 157)という文章が示唆する、作者の真の南部へのこだわりである。同じ「序文」で、「私は両方向のことをやってきたように思えます。逃避しようとし、弾劾しようともしました。5年経過して『響きと怒り』を振り返ってみると、それが転回点だったと分かります。つまり、その本で私は両方のことを一度にしたのです」(158)と述べた感懐から推察できるように、彼の精神的姿勢は、旧南部へのノスタルジアと、現実の南部の糾弾という両方向に引き裂かれていた。その姿勢を『八月の光』以降の作品でさらに苛酷に相対化していくことで、彼は真の南部を究

明しようとしたのではないか。その真の南部を見つめる道は、南部にかかっている「呪いは奴隷制度である」(*Faulkner in the University*, 79) と作者自身が認識していた奴隷制社会とその罪業を直視することであった。それと向き合うことを決めたとき、それまで父と子の関係で見え隠れしていたパーソナルな感情へのこだわりをもっと芸術的に昇華し、歴史的に深く南部の本質、真の姿を探求していく方向に、作家としての活路を見出していく必要性をフォークナーは痛感したに違いない。そのとき、南部の伝統的な氏族社会において、血の継承を重んずる縦の関係、つまり、父と息子の関係が重要になってくるが、家父長制度の象徴としての強い父親とそれに反抗する息子という関係を聖書の物語の構図に重ねることによって、亀山郁夫氏が述べる象徴層のレベルに突き抜けていくことを、どうやらフォークナーは『アブサロム、アブサロム!』で目論んだように思われるのである。

* 本稿は2009年6月27日に慶応義塾大学で開催された日本アメリカ文学会東京支部主催のシンポジウム「今なぜフォークナーか？」に招待されて行った口頭発表に加筆・修正を施したものである。なお日本ヘミングウェイ協会の機関誌『ヘミングウェイ研究』第7号(2006)に掲載の拙論「Home, Homelessness, and New Regionalism——ヘミングウェイが映し出すディアスポラ・フォークナー」(11-23頁)と一部重なるところがある。

引用文献

- Blotner, Joseph L. *Faulkner: A Biography*. 2 vols. New York: Random House, 1974.
One-vol. rev. ed. 1984.
- , ed. *Selected Letters of William Faulkner*. New York: Random House, 1977.
- Faulkner, William. “An Introduction to *The Sound and the Fury*.” *A Faulkner Miscellany*.
Ed. James B. Meriwether. Jackson: University Press of Mississippi, 1974. 156-61.
- . *Flags in the Dust*. Ed. Douglas Day. New York: Random House, 1973.
- . *Light in August*. New York: Vintage International, 1990.
- . “A Note on Sherwood Anderson.” *Essays, Speeches & Public Letters by William Faulkner*. Ed. James B. Meriwether. New York: Random House, 1965. 3-10.
- . *The Sound and the Fury*. New York: Vintage International, 1990.
- Fowler, Doreen. *Faulkner: The Return of the Repressed*. Charlottesville: University Press of Virginia, 1997.
- Gray, Richard. *The Life of William Faulkner: A Critical Biography*. Oxford: Blackwell, 1994.

- Gwynn, Frederick L, and Joseph L. Blotner, eds. *Faulkner in the University: Class Conferences at the University of Virginia, 1957-1958*. New York: Vintage Books, 1959.
- Hamblin, Robert W. Introduction. *Faulkner: A Comprehensive Guide to the Brodsky Collection*. Vol. *The Letters*. Ed. Louis Daniel Brodsky and Robert W. Hamblin. Jackson: University Press of Mississippi, 1984. xi-xxviii.
- Meriwether, James B., and Michael Millgate, eds. *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner, 1926-1962*. New York: Random House, 1968.
- Sensibar, Judith. *The Origins of Faulkner's Art*. Austin: University of Texas Press, 1984.
- Watson, James G., ed. *Thinking of Home: William Faulkner's Letters to His Mother and Father 1918-1925*. New York: W.W.Norton, 1992.
- Weinstein, Philip. " 'If I Could Say Mother': Construing the Unsayable about Faulknerian Maternity." *Faulkner's Discourse: An International Symposium*. Ed. Lothar Hönnighausen. Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 1989. 3-15.
- Wittenberg, Judith. Bryant. *Faulkner: The Transfiguration of Biography*. Lincoln: University of Nebraska Press, 1979.
- 上野俊哉『ディアスポラの思考』、筑摩書房、1999年。
- 亀山郁夫「ドストエフスキーの生涯」、ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』、亀山郁夫訳、エピローグ別巻、光文社、2007年、65-353頁。
- 『ドストエフスキー 共苦する力』、東京外国語大学出版会、2009年。
- 島田裕巳『父殺しの精神史』、法蔵館、1993年。
- 三浦雅士『漱石 母に愛されなかった子』、岩波書店、2008年。
- 四方田犬彦『先生とわたし』、新潮社、2007年。

Patricide in the Fiction of William Faulkner: The Biographical and Textual Analysis

Hisao TANAKA

We know the biographical fact that William Faulkner was at variance with his father. It can naturally be considered, then, that, as a way of subduing and then literally sublimating his own grudge against the father, the writer Faulkner tried to retaliate and punish him by creating shiftless or absent fathers in his fiction. He realized, however, in the process of producing his early masterpieces the paradox that the punishment would necessarily rebound on him, because the father-son relationship was a part of the family relationship which he began, with *Flags in the Dust*, to pursue as an important subject of his canon. The aim of this paper is to explore biographically and textually the aspects of his dealing with that relationship.

[Keywords: patricide, father-son relationship, Dostoyevsky, Soseki, Anderson]